九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Five-Year Incidence of Myopic Maculopathy in a General Japanese Population The Hisayama Study

上田, 瑛美

https://hdl.handle.net/2324/4475021

出版情報：Kyushu University, 2020, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏　　名：上田　瑛美

論 文 名：Five-Year Incidence of Myopic Maculopathy in a General Japanese Population The Hisayama Study
（わが国の地域一般住民における近視性黄斑症の5年発症率：久山町研究）

区　　分：甲

論　文　内　容　の　要　旨

目的：わが国の地域一般住民において、近視性黄斑症の発症率とその危険因子を検討すること。

研究デザインと対象者：日本の久山町での一般住民における前向きコホート研究。2012年に久山町眼科健診を受診し、近視性黄斑症既発症者を除外した40歳以上の住民のうち、2017年に追跡健診を受診した2,164名を最終研究対象者とした。

主要アウトカムと方法：近視性黄斑症の発症。近視性黄斑症の程度は、Meta-analysis of pathologic myopia study group classification system の基準に基づいて分類した。

結果：研究対象者の平均年齢は62.4歳（標準偏差10.9）、男性の割合は42.5%（920人）であった。2012年から2017年の追跡期間中に24人が近視性黄斑症を発症した。近視性黄斑症の5年累積発症率は全体で1.1%（95%信頼区間0.6-1.5）、男性で1.4%（95%信頼区間0.6-2.2）、女性で0.9%（95%信頼区間0.4-1.4）であった。ロジスティック回帰分析による多変量解析では加齢（多変量調整後オッズ比 1.06（95%信頼区間1.01-1.11））と眼軸長が長いこと（多変量調整後オッズ比2.94（95%信頼区間2.19-3.95））が近視性黄斑症の発症と関連した。

結論：わが国の地域一般住民において、5年の追跡期間中に24人（1%）が近視性黄斑症を発症し、他のアジア圏の既知報告より高率であった。加齢と眼軸長が長いことがそれぞれ近視性黄斑症の発症に対する独立した危険因子であった。今後の世界各国での近視性黄斑症の発症率および危険因子の研究が待たれる。